

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 23 日現在

機関番号：84413

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02160

研究課題名(和文)近代における高麗青磁の認識形成に関する研究

研究課題名(英文)Study on the Modern Perception of Goryeo Celadon

研究代表者

鄭 銀珍 (Jung, Eunjin)

公益財団法人大阪市博物館協会(大阪文化財研究所、大阪歴史博物館、大阪市立美術館、・大阪市立東洋陶磁美術館・学芸員)

研究者番号：20531263

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：近代期に高麗青磁を模造して制作された再現品は、当時の人々が高麗青磁をどのように認識していたのかを知るうえで基本的な資料となる。本研究では日本、韓国、アメリカの美術館等を調査し、できるだけ多くの高麗青磁再現品を確認することに力を注いだ。その結果、制作時期を推定できる再現品は少ないものの、様式的な分類が一定程度可能であると判明した。これは、当時の高麗青磁認識を探る大きな手がかりとなる。

研究成果の概要(英文)：Reproductions of Goryeo celadon made in the modern era are fundamental materials for studying how the people at that time perceived and appreciated Goryeo celadon. For this research, I visited various museums and institutions of Japan, Korea and the United States and threw my energies into observing as many reproductions of Goryeo celadon as possible. Although there were few reproductions whose production dates could be identified or estimated, I found out from the observation that stylistic categorization of the reproductions is possible to a certain extent. This is a promising lead to the study of the perception of Goryeo celadon in those times.

研究分野：韓国陶磁史

キーワード：高麗青磁 近代 韓国陶磁

1. 研究開始当初の背景

高麗時代(918-1392)に作られた高麗青磁は、韓国の美術史上に大きな位置を占める美術品である。しかし高麗王朝の終焉とともにほとんどこの世から姿を消し、基本的には近代に至って地中から「再発見」され、収集や研究、再現品の制作が始まった。

ところが、再発見の経緯については諸説が併記されるのみで、いまだに定説と呼べるものがない。また高麗青磁にたいする美的評価の基本は植民地時期にほぼ出来上がり、現在の認識に影響をあたえていると考えられるが、その認識がどのように進展したのかについても、やはり本格的な研究はない。

以上に比べてさらに重要なのは、再現品の位置づけである。再現品には、製作者が高麗青磁の特徴をどのように認識していたのが如実に表れているはずである。ところが従来、ごく一部の研究を除いて、再現品は無価値なたんなるイミテーションと見做され、真摯な研究の対象にさえなっていないのが現状である。

本来は、発見、収集、研究、再現等々の分野が密接に関係しあって、全体として近代における高麗青磁認識を形作っていたはずであり、その総合的整理が望まれる。

2. 研究の目的

本研究は、近代における高麗青磁に対する認識がどのように始まり、またその一環としての高麗青磁の再現品がどのように制作されたのか、その草創期の状況を明らかにするものである。

1) 高麗青磁の再発見、欧米をも含めたコレクションの形成、研究の進展の状況を、総合的に理解することを目指す。

2) 当時の高麗青磁再現品について、国内外の美術館、研究機関等でできるだけ多く実物を調査する。そして、その様式的特徴を明らかにしながら、韓国近代陶磁史のなかに正當に位置づけつつ、研究史等と合わせて近代における高麗青磁認識の全体像を探る。

3. 研究の方法

研究方法としては、1)発見から再現にいたる経緯を整理しつつ、2)近代期の再現品をできるだけ数多く調査し、3)それに関連した文献史料を収集することに、とくに重点を置いた。

2)については、アメリカのフリーア美術館、ボストン美術館、韓国の国立中央博物館、全州国立博物館、東京の東京国立博物館、出光美術館、根津美術館、兵庫県の猪名川町立ふるさと館、京都の個人蔵その他を網羅的に調査する。

3)についてもっとも重要となる各所蔵館の購入台帳や関連する記録等を調査する。あわせて、かねてから行っている新聞、雑誌等の調査を継続する。

4. 研究成果

韓国、日本、アメリカの主要な美術館、博物館、資料館等で、近代期における高麗青磁の再現品を網羅的に調査できたことが、もっとも大きな成果だった。

このうち、たとえば東京国立博物館の所蔵品、アメリカのフリーア美術館、ボストン美術館のうち近代作と思われるものは、非常に高い技術によって制作されているが、館藏品台帳により購入時期や寄贈日が確認できるため、それによって制作時期を比定することもできた。

また兵庫県猪名川町のふるさと館は、植民地期の韓国で高麗青磁の再現品を製造し商品として販売したもっとも重要な人物である富田儀作の製品を所蔵する。その製品には製作地によって漢陽焼と三和高麗焼の二種類があったことが、従来知られていた。ただし、それらの製品にどのような違いがあったのかはつきりせず、さらに販売金額は、ほとんど知られていなかった。今回、漢陽焼と三和高麗焼を判別する手がかりが得られるとともに、付属資料から、販売金額や流通にかかわる状況の一端を知ることができた。

国立韓国中央博物館と全州国立博物館では、李王家美術品製作所の製品と類似する高麗青磁をいくつか調査し、大阪市立東洋陶磁美術館に存在する李王家美術品製作所の作品の見本となるものを確認することができた。李王家美術品製作所は、やはり植民地時期に富田とならんで高麗青磁の再現品を制作したところである。再現レベルの水準は、低級品から高級品までがあり、大阪市立東洋陶磁美術館蔵の作品は、本来の高麗青磁と区別が付かないほど高い技術によって再現されていることも、あらためて確かめることができた。

ただし、制作年代を推測できる再現品は多くはなく、その歴史の変遷を明らかにすることはきわめて困難である。そのようななかできわめて重要なものが、アメリカのフリーア美術館である。フリーアは実業家で、かつアジア美術の収集家でもあったが、もっとも初期の段階に収集された高麗青磁コレクションであるアレン・コレクションがここに所蔵され、初期段階の再現品を探ることのできる貴重な資料となっている。アレンは当時韓国に駐在していたアメリカ人医療宣教師である。

このアレンが自著のなかでコレクションに「近代作」が入っていると述べ、その写真さえ添えている。そこで大いに期待して実際に調査したところ、じつは高麗時代に制作された本物の高麗青磁であった。そこで、非常に早い時期にアレンを悩ませる高麗青磁贋作の問題が現れていたことをどのように理解すべきか、という点に加え、アレンがなぜこの作品を再現品と誤認したのかが、新たな問題として浮上した。ただし、フリーアが収集した他の高麗青磁のなかに再現品が含ま

れ、しかも購入台帳が完備しているために、購入の際の状況も知ることができた。また、関連資料も収集することができた。

これら以外の美術館等での調査を含めて、一定数の再現品を確認することができ、制作年はかならずしも判然としないものもあるが、様式的な分類が可能であることがわかった。本研究期間内にそれを論文等の形で公表することはできなかったが、できるだけ早い機会に整理し、公表したい。

そのほか、高麗青磁の優品は、近代初期の段階でアレンをはじめとする欧米人のコレクターも数多く収集しており、そのなかには再現品も含まれていると思われる。そのようにして欧米に運ばれた作品の調査も欠かせない。Orientation 誌に英語で発表した論文によって、高麗青磁の再現品というテーマを欧米の研究者に改めて紹介することができたと思われる。

本論文では、再発見から再現品の制作にいたる過程をあらためて跡づけた。これに関連して決定的に重要な人物は、やはりアレンである。アレンによれば、高麗青磁が本格的に世の中に出てくるきっかけとなったのが、甲申政変だったという。そして、現存する資料による限り、もっとも早く再現品の存在に言及したのもまたアレンであり、再現品を作ったのは日本人だとする。それがどのような人たちだったのかは、ある程度推測できるものの、確かなことは分からない。

誰が、もしくはどこで再現品を作ったのかがやや明らかになりはじめるのは、日本が影響力を強めるなかで工業伝習所や朝鮮総督府中央研究所などの研究、教育機関が設置されてからだった。そこに、前述の富田儀作なども加わってくる。それらの作品のなかには技術的に非常にすぐれたものがあり、当時の技術レベルの高さをうかがわせる。同時に、当時の陶工の回想などから、再現の際の重点の置き方に製作者ごとの特徴があったことなども判明するが、これはとりもなおさず、再現品からみた高麗青磁認識にほかならない。

なお、本論文にたいして、アメリカのある美術館の学芸員から、所蔵の高麗青磁をもう一度精査してみたいという感想が届いた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

鄭銀珍、朝鮮王朝時期的文人趣味と哥窯、紫禁城(北京) 査読有、275、2017、94-105

Jung Eunjin, The Imitation Game: Reproductions of Goryeo Celadon in the 20th Century, *Orientation*, 査読無、47-2, 2016, 131-137

鄭銀珍、近代韓国陶磁研究の歩みと高麗青磁の再現、出光美術館館報、査読無、173 巻、2015、4-30

鄭銀珍、大阪市立東洋陶磁美術館 日韓国交正常化 50 周年記念国際交流特別展 新発見の高麗青磁 韓国水中考古学成果展に寄せて、陶説、査読無、751、2015、48-54

鄭銀珍、海上瓷路 出水翡青 大阪市立東洋陶磁美術館 高麗青磁新発見 - 韓国水中考古学成果展、典藏(台湾) 査読無、277、2015、138-143

[学会発表](計 3 件)

鄭銀珍、朝鮮王朝時期的文人趣味と哥窯、故宮博物院哥窯學術検討会(北京) 2017(招待講演)

鄭銀珍、濟州島出土の陶磁器 高麗時代を中心に、李秉昌博士記念公開講座 東アジア海域と高麗青磁、2016

鄭銀珍、近代における韓国陶磁の歩みと高麗青磁の再現、出光美術館、2015(招待講演)

[図書](計 5 件)

鄭銀珍「近代日本の陶磁輸出 朝鮮市場とアメリカ市場」佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学 第6巻』雄山閣、2017年、265-283

鄭銀珍、濟州島出土の陶磁器 高麗時代を中心に『李秉昌博士記念公開講座 - 東アジア海域と高麗青磁』大阪市立東洋陶磁美術館、2016、84-92

鄭銀珍、大阪市立東洋陶磁美術館所蔵の高麗青磁枕と花入『新安海底船から引き上げた物』韓国国立中央博物館、2016、73-75

鄭銀珍、日韓国交正常化 50 周年記念国際交流特別展 新発見の高麗青磁 - 韓国水中考古学成果展(図録編集)、大阪市立東洋陶磁美術館、2015、302

鄭銀珍、高麗青磁研究と水中考古学『日韓国交正常化 50 周年記念国際交流特別展「新発見の高麗青磁 - 韓国水中考古学成果展」(図録)』大阪市立東洋陶磁美術館、2015年、230-235

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鄭銀珍 (JUNG, Eunjin)
公益財団法人大阪市博物館協会・大阪市立
東洋陶磁美術館・学芸員
研究者番号：20531263

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()